

メウロコ英文法のすゝめ

中本 恭平

大学で英文法講座を担当して16年になる。この間、さまざまなアプローチを試したが、現在では「1つの形式には1つの意味があり、形式が異なれば必ず意味が異なり、形式が同じなら必ず意味にも共通点がある」というスタンスの英文法に落ち着いている。「目からウロコの英文法」、通称「メウロコ英文法」と名づけて教壇に立っている。

たとえば、現在時制の文と過去時制の文の意味の違いを説明するために、メウロコ英文法では Yule (1996: 14-15) に倣って、直示(*deixis*)表現という観点からとらえ直している。現在時制は近称(*proximal*)表現、過去時制は遠称(*distal*)表現であり、簡単に言えば *this* と *that* の違いに行き着く。つまり、*now* は *this time* であり、*then* は *that time* である。メウロコ英文法では「近い」「遠い」からさらに一步踏み込んで、現在時制という文法形式がもつ意味は「発話時を含んで成り立っていることを表す」と規定し、過去時制という文法形式がもつ意味は「発話時を含んで成り立つことを意味せず、場合によっては、発話時には成り立たないことを表す」と規定している。

たとえば、

(1) I live in Tokyo.

(2) I lived in Tokyo.

では、(1)は発話時において東京暮らしである事実が成り立っていることを表すが、(2)は発話時においては東京暮らしであることを意味せず、通例、現在では東京以外のところで暮らしていることを意味する。(2)からは現在の居所がわからないので、この文だけだと不安定である。

このアプローチを取ると、たとえば次の(3)の不自然さも容易に説明がつく。

(3) *I am born in Osaka.

(4) I was born in Osaka.

自分自身の「誕生」は常に発話時からは離れた出

来事であり、発話時を含んで成り立つことはない。そこで(3)は矛盾するのである。ただし、自分の「出身地」は必ず発話時を含んで成り立つため、(5)のように現在時制で表される。

(5) I am/come from Osaka.

しかし、*be born* という表現が常に過去時制で用いられるわけではない。第三者について言及する場合には、誕生が発話時において成り立つこともあるからである。

(6) One third of all children are born into single-parent families. (LDOCE⁵, *born* の用例)

この文では、この状況が発話時においても成り立っていることを意味している。

遠称形である過去時制は、Yule も指摘するように、学校文法で「仮定法過去」と呼ばれている(8)のような文でも用いられる(いずれも Yule の例文より)。

(7) I could swim when I was a child.

(8) I could be in Hawaii if I had a lot of money.

学校文法では(7)はふつうの「過去」であるが、(8)は「仮定法過去」と分類され、別形式となる。しかし、メウロコ英文法では、どちらも「発話時を含んで成り立つことを意味せず、場合によっては、発話時には成り立たないことを表す」を意味しており、(7)は「現在から離れた出来事＝過去の出来事」、(8)は「現実から離れた出来事＝現実離れしたこと」を表すととらえる。この意味において、筆者は「過去形」という名称は誤解を招くと考え、「離れ形」(つまり遠称形)と呼んでいる。現在あるいは現実から離れているととらえられた出来事は「離れ形」で表されるのである。

生徒や学生は、昨日や先週の出来事は過去形で表すと考える。しかし、昨日や先週の出来事でも現在時制で表されることは多々ある。

(9) There is nothing I can do about this right

now.

(10) There are many interesting places to visit in Kyoto.

(9)のnowが意味するのは、発話時を含むごく短い時間のように感じられ、それゆえ昨日や先週を含んでいないように感じられるが、(10)では、まず間違いなく昨日も先週も同じ状況であったはずである。

このように、現在時制と過去時制の領域については、何分前、何日前なら過去になるといったような絶対的なとらえ方はできず、というか、そのようにとらえられておらず、あくまでも相対的なものである。現在時制と過去時制がthis/thatの区別に行き着くことを考えれば当然である。

そもそも現在時制の「近い」とか過去時制の「遠い」あるいは「離れている」というのは、空間表現からの借り物、すなわち比喩である。現在・過去の区別が相対的なものであることを学習者に知ってもらうために、メウロコ英文法では空間表現と時間表現の関連性を指摘することから説明を始める。

(11) Which cat do you like better, this one or that one?

(12) Roses are at their best at this time of year.

(13) I didn't have much money at that time.

何センチ、何メートル離れるとthisがthatにシフトするとは言えないように、何時間、何日離れるとthisがthatになるとも言えない。自分のいる場所・時間(=発話時)を含むと話し手が感じればthisを用い、含まないと感じればthatを用いるのである。これは日本語の「これ」「それ」となれば変わらない。

(14) これをあなたにあげます。(自分の領域内)

(15) それをください。(自分の領域外)

(16) これから説明します。(自分の領域内)

(17) それからどうになりましたか。(自分の領域外)

生意気な、いや、鋭い生徒なら、「次の文ではthisが用いられているのに過去時制なのはどうして」と質問に来るかもしれない。

(18) I met Tom this morning.

余談になるが、このような質問を受けたとき、教師が躍起になって反論するのは大人げない。おもしろいところに気づいたね、とまず褒めて、さあどうしてかなあ、とちょっとじらして、それは次のよう

な理由からなのだよ、と生徒の好奇心を満たしてあげよう。

(18)で話題となっているのは、私がトムと会ったという事実であり、それは発話時からすでに離れた出来事としてとらえられているので、meetという動詞は「離れ形」たる過去形になっているのである。次のように考えるとわかりやすい。

(19) I met Tom at that time this morning.

ちなみにthis morningとなっているのは、この「朝」が発話時と同じ「日」に属しているからである。つまり、the morning of this dayということである。発話時が午前中である場合に限って(18)が用いられるわけではないことを考えれば納得いくだろう。

(18)の説明で、次の空間表現と比較するのもよい。

(20) Open that window in this room.

(20)で話題となっているのは「この部屋」ではなく、この部屋の中にある「その窓」である。部屋は自分の領域内にあっても、窓は領域外にあると感じるのである。「この部屋」や「今日」自体が話題となっている場合には、次のようになるだろう。

(21) Come to this room.(cf. Come here.)

(22) Today is my birthday.



現在時制・過去時制それぞれの意味を正しく理解していれば、多くの日本人英語学習者が苦手としている現在完了と過去時制の意味の違いも、簡単に理解できるはずである。たとえば、次の2つの文は、前者が現在完了、後者が過去形であるから、それぞれ形式が異なるので、当然、意味も異なる。

(23) I've lost my cell phone.

(24) I lost my cell phone.

現在完了は、have/hasという現在形が用いられていることから明らかのように、現在時制の文であることをまず押さえる必要がある。現在時制の文は「発話時を含んで成り立っていることを表す」ので、(23)の意味の重点は発話時の状況にある。つまり、携帯電話を紛失した後の「今」の状況について言及しているのである。紛失という出来事が発生したことによって、発話時において話者にどのような影響が生じているのかを(23)は伝えている。常識的な知識を活用すれば、困っている、悪用されないか心配している、今は携帯電話が使えない状況にあるなど、話し手の心の内を想像すればよい。

一方、(24)の過去時制は発話時から「離れた」出来事を述べており、発話時の状況については何も物語っていないので、この文だけだと不安定である(本稿冒頭の(2)も参照)。紛失をきっかけに携帯電話を解約したのか、それとも新たに契約し直したのか、あるいは lost-and-found に届いていて本人の手に戻ったのか、この文は何も伝えない。

つまり、現在完了では、学校文法でいう「結果」が重要なのである。「結果用法」というと

(25) John has gone back to England.

のような例文がもっぱら用いられるが、

(26) We have worked very hard today. (完了)

(27) We have known each other for ten years. (継続)

(28) I have been to India three times. (経験)

などにおいても、すべて発話時の状況について言及しているわけであるから、どのような影響が発生しているのか(つまり「結果」)を読み取る必要がある。それぞれ、たとえば、疲れている、親しい間柄だ、インド通だ、などの含意(implicature)が、文脈に応じて得られるはずである。このように、現在完了では用法に分けるのではなく、あくまでも現在時制の文であるということを押さえ、話者の発話時の状況を読み解く姿勢を学習者に身につけさせたい。

ところで、現在完了が ago と共起しないことは英語が苦手な生徒・学生でも比較的よく知っていることであるが、その理由については、英語が得意な生徒・学生でもわからないというのが実情だろう。しかし、ago が語源的に「過ぎ去った」という意味をもっていることを確認すれば、疑問は氷解する。現在から「過ぎ去った」つまり離れた出来事を表すのは過去時制の文であり、現在時制である現在完了ではないからである。もし現在完了の文で ago を用いると、this 時制と that 時制が同居することになるので、空間表現にたとえると、さしずめ

(29) *Look at this that cat.

というような論理的に矛盾する意味不明の文となってしまうことだろう。



メウロコ英文法では時制や完了の問題だけでなく、進行、完了進行、話法、法助動詞、受動態、不定詞、動名詞、さらには冠詞、形容詞、不定代名詞などについても、「1つの形式には1つの意味があり、形式が異なれば必ず意味が異なり、形式が同じなら必

ず意味にも共通点がある」という姿勢で再解釈を試みている。本稿を閉じる前に、as と分詞構文を取り上げよう。

as は副詞、接続詞、前置詞、関係代名詞と品詞が多岐にわたることに加え、「同じくらい」「…するとき」「…なので」「…として」「…のように」などの互いに関連性がないかのような日本語の訳語に対応するため、苦手意識をもつ生徒・学生は多いはずだ。しかし、as という1つの形式にはただ1つの意味があるのだという立場に立てば、学習者の肩の重荷は驚くほど軽くなるだろう。

メウロコ英文法では、as という形式の意味を「同じ」ととらえる(語源的には also と同語源で「全くそのように」の意であるが)。そうすると、次の各文は以下のように分析できる(用例は LDOCE⁵ より)。

(30) an old woman with hair as white as snow
→「髪(の色)」と「雪(の色)」が「白」で同じ。

(31) I saw Peter as I was getting off the bus.
→「ピーターを目撃する」と「私がバスを降りる」が同じ(時)に発生。

(32) As it was getting late, I turned around to start for home.

→「遅い時刻になってきた」と「家路に向かう」とが同じ(時)に発生。前者が後者を引き起こす原因となっている。

(33) A flat stone was used as a table.

→「(表面が)平たい石」と「テーブル」が(機能の点で)同じ。

(34) Do as I say!

→「(聞き手の)行為」と「話し手が言う(こと)」が同じになるようにせよ、と命令している。

一方、学校文法で「分詞構文」と呼ばれている文法形式も、「同じ時」でとらえることができる。以下の用例は江川(1991: 344-345)より引用した。〈 〉内の用法分けも江川による。

(35) Looking down from the plane, I could see the east coast of the coral island. (時)

→「飛行機から見下ろす」と「珊瑚島の東海岸が目に入る」が同じ時に発生。前者が後者の原因になっている。ただし、島を見ようという意図で見下ろした(たとえば、だれかが「島が見える」と言ったので、この話者も見ようとした)のか、見下ろしたらたまたま島が目に入ったのかは、文脈が決まる。

③6) Being a farmer, I have to get up early. 〈理由〉
→「農業に従事する」と「早起ししなければならない」が同じ時に発生。前者が後者を引き起こす原因となっている。

③7) The typhoon hit the city, causing great damage. 〈付帯状況〉

→「台風が市を襲う」と「甚大な被害が発生」が同じ時に発生。前者が後者を引き起こす原因となっている。

③8) Going ahead for a mile, you will get to the pier. 〈条件〉

→「この先1マイル行く」と「棧橋に到着する」が同じ時に発生。前者が後者を引き起こす原因となっている。

③9) Admitting you have a point, I still think I am right. 〈譲歩〉

→「相手の言い分を認める」と「自分が正しいと思う」が同じ時に発生。つまり、両方の気持ちが話者の頭の中に存在している。「相手の言い分を認める」は従属節で言い表されているため、主節の「自分が正しいと思う」に比重がある。

そもそも「分詞構文」は、便利な簡略化表現である。次の文を比較するとそれがわかる。

④0) The typhoon hit the city. It caused great damage.

④1) The typhoon hit the city and caused great damage.

④2) The typhoon hit the city, causing great damage.

④0)は接続詞を用いずに文を連結した場合(第2文冒頭の代名詞に注意)、④1)は接続詞を用いて連結した場合、④2)は現在分詞を用いて連結した場合である。④0)のように文をぶつぶつ切ると、箇条書き風のぶっきらぼうな文章になってしまう。さりとて、すべての文をand, but, because, althoughなどの接続詞でつなぐと、不自然さを通り越してほとんど滑稽な文章になってしまう。そのどちらの調子にもならないのが分詞連結である。分詞を用いて連結すれば、文は緩やかにつながり、さらさら流れるような文体になるはずだ。「分詞構文」をこのような角度からとらえるのは重要なことだと思う。

余談ながら、関係代名詞を用いた連結にも分詞連結と同じような働きがある。

④3) The typhoon hit the city, which caused

great damage.

実際には、文を切る、接続詞で結ぶ、分詞や関係代名詞を用いるといった方法が適宜組み合わせられて談話(discourse)が構成されるであろう。

このように、メウロコ英文法では細かな用法分けは排除し、逆に同一形式(asや現在分詞に導かれる従属節)に共通する意味を見だし、解釈することを学習者に促す。「理由」や「譲歩」などの意味合いは、それぞれの文で述べられている(対比されている)2つの命題を、文脈の中で論理的に解釈すれば得られるものである。



本稿では、私が英文法講座で採用している「メウロコ英文法」の一端を紹介したが、このアプローチの目標は、

- (a) 正しい解釈ができるようになること(たとえば、②3②4をどちらも「携帯電話をなくした」と同じ日本語に置き換えて、わかったような、わからないような状態にとどめておくのをよしとしないこと)であり、さらには
 - (b) 自分の言いたい(書きたい)ことに合わせて適切な文法形式が選択できるようになることであり、ひいては
 - (c) 文法体系がでたためにできているのではなく、極めて合理的にできていることを知ることにつながり、最終的には
 - (d) 人間が自分を取り巻く世界をどのようにとらえているかを意識し、考えること
- である。欲ばった目標のように思われるかもしれないが、決して大風呂敷を広げているつもりはない。細かい用法分けから学習者を解放し、その代わり、話し手・書き手の言いたいことを鋭く見抜く能力を磨き、コミュニケーション能力を高めてもらおうというのが、授業担当者の願いである。

参考文献

- 江川泰一郎(1991)『英文法解説改訂三版』金子書房。
Longman Dictionary of Contemporary English,
 5th ed. (2009) Pearson Education. (LDOCE⁵)
 Yule, George. (1996) *Pragmatics*. Oxford University Press.